# 告白8

津田哲也
ジャーナリスト
拳銃も薬物も
警察が蔓延させた。

## 津田哲也（つだてつや）ジャーナリスト

１９５９年2月16日、京都市で生まれる。21歳から事業を始め、１９８６年に大阪でモデルガンショップを開く。１９９１年、銃刀法違反容疑で逮捕され、執行猶予つきの判決を受ける。その顛末をつづった『拳銃密売人　凶銃トカレフ拡散の謎』（イースト・プレス）でデビューする。著書に、『銃社会ニッポン』（テレビ朝日）、『汚名刑事』（小学館）、『脳を食む虫』（マイクロマガジン社）などがある。

## 警察そのものが腐敗している

――津田さんは、警察の銃器捜査に精通している数少ないジャーナリストの1人です。そんな津田さんから見て、映画『ポチの告白』はいかがでしたか。

**津田**　実際に起きた事件をベースにしているので、エピソードをつなげてストーリーを組み立てることに多少無理があったような気はしますが、1つひとつの事件はよく描けていたと思います。

いちばん感心したのは、警察組織が持つ「空気」をうまく表現していたことです。例えば、飲食店経営者の草間が警察の違法行為に気づいたときのこと。刑事課長の三枝はタケハチと山崎に「任せる」とだけしか言いません。山崎は上司の意向を察して、チンピラに草間を襲わせ、ボコボコにします。三枝は、草間が入院したとの報告を聞き、「偶然だったかもしれないけど、よかったじゃない」と、〝偶然〟を念押ししつつ、満足します。いちおう日本も民主主義国家なので、部下といえども、いつ暴露するかもわかりません。だから上層部は証拠を残さないよう遠まわしに指示するんですよね。

映画に出てきた交番勤務の警察官など、性犯罪を犯罪と思っていないふぜいでしたが、現実の警察官もそうだと思います。警察は極端な男性本位社会で、性犯罪をすごく軽く扱う傾向があるんです。知り合いの警察官によれば、留置係で女

「（草間は）経営していた店のことで、ヤクザともめていたみたいですね」と三枝刑事課長に報告する山崎。隣は浮かない顔のタケハチ。

性警察官の宿直が導入された際、宿直室に男性警察官が集団で押し込み、女性警察官をレイプする事件が横行したそうです。これを問題視した人が警務部長に報告したところ、「そんなもん、宿直室にカギをつけたらええだけやんけ」と一蹴され、調査や処分などは一切行われず、女性警察官の宿直室にカギが設置されただけで一件落着とされたというのです。被害にあった女性警察官は、退職して泣き寝入り。集団レイプは凶悪犯罪なのに、それだけで済ませてしまうのが警察という組織なんです。

奈良巡査長が若い女性にからかい半分で職質（職務質問）をかけ、あとで上司から、こう叱責されていました。

「本庁に名指しで苦情来たんだよ。職質かけた専門学校生は、都議会議員の娘だ。公衆接遇の基本は相手が誰だかわかるまで崩すんじゃない。相手が一般人だったら何やってもいいよ」

彼らのなかでは一般人もみごとに階層分けされていて、特に暴力団組員、不良少年、水商売の女性には本当に何をしてもいいと思っている。『ポチの告白』のなかでも、不良少年が交番に連れ込まれてリンチされていましたよね。

具体的にどのシーンがリアルだったというよりは、こういった警察特有の空気を表現していて非常にリアルでした。一般の人はこういう空気がわからないから、「悪いのは末端の警察官だけ」「警察の一部が腐敗しているだけ」と思いがちです。

【警務部長】
都道府県警における人事や監察などの責任者。キャリアが就くことが多い。

若い女性が交番へ道を尋ねに来ると、奈良巡査長が興味本位で職務質問を始めた。